授業探訪

言語系科目・言語 B 自由科目

フランス留学準備に特化した「フランス語総合 3」科目の先行開講

全学共通カリキュラム運営センターフランス語教育研究室主任／
外国語教育研究センター教授　関 未玲

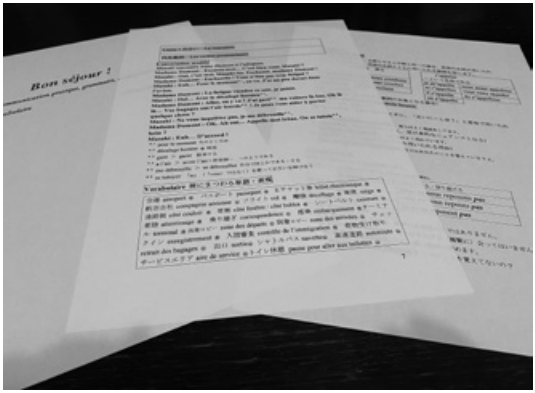
全学共通カリキュラム運営センターが運営する言語系科目では、2024 年度にフランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、朝鮮語、ロシア語の 6 言語で、新カリキュラムを導入する予定です。必修科目では他言語とともに、履修者 20 名を上限とする少数規模のクラス設定で、実践的なフランス語表現力の強化を目指した授業を新しく開設してゆくことになりますが、自由科目についても新たな科目群を設定し、グローバル世界を生き抜く学生のニーズに沿うような科目を順次開講してゆきます。これまで自由科目では、中級と上級というレベル別の科目設定をしてまいりましたが、価値観が多様化する世界情勢のなかで学生の目的意識も、語学習得に求めるプライオリティーも、今後益々変化してゆくことは必至です。このような変化を見据えてレベル設定はもとより、履修の目的をさらに明確化するために、自由科目を「留学準備領域」、「プロジェクト領域」、「キャリア領域」、「アカデミック領域」という 4 つの領域に区分し、各領域にかなった授業をそれぞれ展開してゆく制度設計を行いました。履修制度が複雑化する傾向にある昨今、学生がどの科目を履修したらいいのか迷ってしまうというロスタイムも避けたいという意図もありました。レベル設定としては、「留学準備領域」から「プロジェクト領域」、その後に「キャリア領域」、そして「アカデミック領域」へと難易度が上がってはゆきますが、「プロジェクト領域」では語学力のレベルアップだけでなく、文化・社会・フランス語圏の連帯や日仏文化理解など、語学以外の知識と知見を深める授業も準備しています。

それぞれの領域別で簡単に設置科目をご紹介すると、「留学準備領域」では文部科学省が後援している実用フランス語技能検定試験の対策や、フランス国民教育省認定の DELF/DALF、フランス高等教育省や文科省認定のスコア型試験 TCF などの検定対策を行いながら、学外でも通用するフランス語の実力を実感できるような授業を展開予定です。「プロジェクト領域」では、フランス語力の強化も目指しながら、フランスまたはフランス語圏の時事や文化などを多角的に学び、知見を養う授業を開講してゆきます。現在フランス語は、世界 5 大陸において話されており、アフリカ大陸での話者が増加したこともあり、諸説はありますが 3 億人がフランス語を話すと言われています。32 カ国・政府の公用語として用いられており、フランス語圏の連帯は「フランコフォニー」と称されて、毎年 3 月には「国際フランコフォニー」の誕生を記念して、世界各国で

フランコフォニー関連のフェスティバルが開催されています。フランス本国に限っては、テロや移民問題など国内事案が多発していますが、それでも対話を通して国内問題に取り組み、フランス語圏の連帯を模索しているフランスから学ぶことは多々ありそうです。「キャリア領域」（2025 年度開講予定）では、ビジネスシーンを左右するディスカッション力の強化や履歴書等の作成を学ぶ授業、「アカデミック領域」（2026 年度開講予定 ）ではリサーチやプレゼン力を高める実践的な授業と CLIL 科目の展開を目指してゆきます。

「留学準備領域」のなかには検定試験対策を目的とした授業以外にも、短期・中期留学を見据えた学生のために、「留学準備」そのものを目的とする科目も導入します。2023 年度、先行実施科目として「フランス語総合 3」（2024 年度以降は「フランス語総合 5 ・ 6」として展開予定）科目を一足早く開講することができました。複数の大学で教鞭をとってまいりましたが、履修生のニーズが明白な「留学」準備に特化した科目がないと常々思っておりました。高額な費用もあって、全ての学生がフランス留学を実現できるわけではありません。しかし、長い今後の人生においてビジネス等で必要となる可能性もあるだろう「いつか」に備えて、学生時代に語学のみならず、生活面・経済面・治安面・異文化理解というさまざまな観点から、フランスへのアプローチを学べるような授業があれば、ぜひこれを導入したいと思っていました。

直行便で現在およそ 14 時間もかかってしまうフランスにせっかく留学に行くのだから、履修生はさぞかし準備に余念がないだろうと思われているかもしれませんが、この物価高も手伝ってフランス留学はとかく物入りとなり、バイト三昧の学生も少なくありません。ガストロノミーが世界遺産として登録されているフランスの食を堪能もしてもらいたいし、美術館巡りや映画鑑賞をして週末を過ごしてもらいたいとも願ういっぽうで、肝心なフランス語力が伸びなければ、現地授業でフランス人の先生や他国から来る留学生とのコミュニケーションを謳歌できないことは明らかです。そこで、できる限り学習時間を効率的に使う授業が展開できないかと考えていました。そのような思いから、実際に必要性の高かった会話をアレンジしたダイアローグを中心に、中級文法の確認と、とりわけ留学参加者からリクエストの多かった動詞活用の例文をふんだんに盛り込んだ教科書『ボン・セジュール (仮題)』を、前職時代の同僚の先生方と 2024 年度中の刊行を目指して作成しておりました。先行実施された「フランス語総合 3」では、本学フランス



語教育研究室の先生方にもお認めいただき、『ボン・セジュール』の試作版を用いることができました。出会いの挨拶場面や、初回授業の会話、移動手段として有効なバスの乗車時、ホームステイ中、別れの会話など 20 の場面を想定したダイアローグを通して実践的な会話力を高め、語彙力を増やす内容となっています。何より、実際どのような状況に置かれ、そこではどのような会話をすればまずはスタートを順調に切ることができるのか、学生にイメージトレーニングしてもらいたいと思って作成しています。

実際の授業では、授業 100 分間を留学準備すべてに割くことができるように、筆記と口頭の暗記を各授業回終了時までの課題として課し、最後の 15 分間に暗記できた人から授業を終了するという形をとりました。ですので、履修生は授業のスキマ時間に一人一人暗記に余念なく、集中しています。各回授業は会話練習からスタートし、文法事項の確認を行った後、何人かの履修者と組んで会話練習を数回繰り返します。暗記は得手不得手があるとは思いますが、どの学生も回を重ねれば、着実に暗記力は定着します。上級者を除けば、短期留学では実際のところ複雑な会話をすることは稀で、定型句を駆使しながら、会話の精度を高めてゆくことになります。そのため、いかに出発前に定型文を覚えて臨めるかが重要となります。また、リエゾンやアンシェヌマンなど語彙と語彙をつなげて発音するフランス語の文では、中級レベル者では、いかに多くの文を耳にして出発するかが鍵となります。幸いなことに、前任校の引率先であったオルレアン大学とのご縁から、同大学から本学に留学中だったロイック・アエクースさんが毎回授業に参加してくれました。学生とフリートークをしたり、発音のポイントを教えてくれたり、フランス事情についても話してくれました。さらにゲストスピーカーとして、フランス政府留学局日本支局イベント・PR 担当の熊本カロリーヌ氏にお越しいただき、貴重なフランス留学の最新情報について紹介していただきました。奨学金情報や欧州留学フェアの案内、学割や医療費、住宅補助に加えて、留学生向けの諸制度、さらには大学制度等など話は多岐にわたりました。また多民族が暮らすフランスの多文化カルチャーについても、熊本さんご自身の経験も含め履修生に熱く語っていただいたことで、大きなエールを学生に送っていただきました。

授業のメイン・イベントとなるのは、「日本文化発信」を目的とする書道体験です。昨今フランスでは空前の日本ブームが続き、日本文化への興味・関心が非常に高くなっています。かつてオルレアン大学のご厚意で、エントランス広場の使用許可をいただき留学参加学生とともに書道と茶道の体験会を開いたことがありました。学内 ML で宣伝していただいたことも手伝って 90 分ほどのランチタイムに、100 名はくだらない数のオルレアン大生が参加してくれました。この交流をイメージ源として、「書道体験」の授業設計を試みました。未知の授業に対して、フランス語の授業内でなぜ書道セットの購入が必要となるのか、関係各所にご理解いただくところから準備は始まりました。また、語学授業内で初めて行う交流体験型の授業回であったこともあり、履修生に対してもイメージの共有を丁寧に行ってゆきました。「書道体験」には授業の 2 回を割き、まずはリハーサル回を設けました。授業の前半には、6 グループからそれぞれ書道の歴史、

日本における書道の発展、楷書と行書、筆の使い方などをプレゼンしてもらいます。書道の概要についてフランス語で説明を行ったあと、本学在籍のフランス人留学生に書道を体験してもらうため、書き方のお手伝いをしながらコミュニケーションをはかり、日仏文化交流の機会としました。実際には、当日に限って AV 機器の調子が悪かったり、準備していた漢字（侍、道）がフランス人留学生には簡単過ぎて、「愛」「鶴」「無」なかには「鬱」という漢字をスラスラと書いてしまう留学生もおりました。何事もやってみなければわからないことだらけで、来年度への課題も見えてきましたが、国際センターのご協力を得て参集してくれた 15 名の留学生とともに、総勢 39 名で書道体験を行ったことは、非常に大きな成果だったと思われます。残った時間を使って、日仏それぞれの早口言葉を伝言ゲーム形式で学んだりもしました。短期留学は、ある意味初対面の連続でもあります。短時間でコミュニケーションをはかれる技術は、フランス語の実力同様に大切なスキルとなります。初対面の留学生へ積極的に声をかけ、時間を共有できたことは、実際の留学時に自らの見えない手となって背中を押してくれると期待しています。

コロナ明け間近の 6 月 13 日に実施したこともあり、飲食をともなう「茶道」体験実施に向けてはまだまだ課題も多いところですが、2024 年度には「書道体験」に加えて「華道体験」なども取り入れてゆく予定です。日本文化発信をきっかけとして、フランス人留学生との交流の機会を持ち、実際の留学につながるか否かにかかわらず多くの出会いと異文化交流を授業内で体験できる機会をさらに増やしてゆけるようにと思っております。ご協力いただきました皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

せき　みれい